

火星



平成17年 9月号

七曜抄（二）

山尾玉藻

さきほどと違ふ雨降る瓜畑

灌じめりの七夕笹をくぐりけり

灌道を下り来る顔の大きかり

その指輪寂しからむと青葉木菟

ぼうふりの水松風に窪みけり

さつきより夕日がかりの行々子

片蔭を踏んで地獄絵見にゆけり

洪水の碑のたかだかと昼寝村

水盤に木賊の立てる盆三日

秋口の松の影なるあめんばう

〔俳句〕九月号より一部転載

太白星

柳生千枝子

かたつむり渡り了せし草の丈
短夜や夢の途切れの中にゐて
明易し確かに聞きし船の笛
昨日より太りし雨の実梅なる
夏暖簾老舗の奥に冷えが棲む
夫留守の夜を知りてをり五器かぶり
藁灰や静かに進む夏点前

杉浦典子

木の橋に木の舟繫ぐねむの花
夏鴨の水の明るき夕ごはん

桑の実や母に嘘つきとほしたる
夏の月あら煮の目玉つつきけり
大いなる雲の影ゆく辣蕪畑
茂り葉に雨のはげしき蕎麦湯かな
朝涼の水渡りくる応援歌

浜口高子

一面の代田に旅荷解きにけり
マーメイド号日傘の影に着きにけり
ラヂオ体操代田眼下にはじまりぬ
星絵図の天の川より紙魚こぼる
手花火の雫落ちたる峡の闇
夕焼に染むる田水に指濡らす
蝸牛背^ナの子足をばたつかせ

火星作品 山尾玉藻選

虎杖の花のうしろの角突場 神戸 深澤 鱧

兄と見てゐる山古志の青田かな

はんざきに屈みてむかしをとこなり

打水の橋へ流るる鮎の宿

雲ヶ畑の雲喰ふ鯉のなますかな

花嫁に近づきすぎし雨蛙 西宮 米澤 光子

結葉や巫女の手桶のたぼたぼす

神輿庫開いてをりし揚羽蝶

をんなならに覗かれ海月沈みけり

薔薇垣にすべり込んだるブーメラン

梅雨寒を編みはじめたり蜘蛛の糸 大和郡山 城 孝子

喪支度や乾いてゐたる大蚯蚓

鮎食うて夕ぐれのこゑ出しにけり

川床料理をとこの臍のさびしかり
くるぶしを吹く風のあり祭前
梅雨月の昇りて止る扇風機
後ろ手をつけば実梅の残り
短夜の音二階より降りきたる
でで虫の空見て暮す山家かな
大手門亭午の水の打たれあり
鎌低く使うてをりぬ杜若
シーソーに先客ありぬ蝸牛
藻畳にへりのありけり小鯨刺
忠犬の銅像の辺の明易し
鳶口を腰に挿しをり灸花
父の日の壕に蝮の育ちをり
六月の寺に積みある杉の皮
梅を干す妻にたしかな乳房あり
竹煮草雨の匂ひになつてきし
乗鞍と同じ高さの枝蛙

明石戸栗末廣

八幡飯塚系子

吹田伊藤多恵子

選のあとに

山尾 玉藻

打水の橋へ流るる 鮎の宿 深澤 鱧

京都雲ヶ畑の句。吟行句会では共通体験による共感に溺れ、とかく選を見誤ることがある。しかしこの句の「橋へ流るる」には「鮎の宿」の在り様の象徴がある。淡々とした表現の佳句である。

花嫁に近づきすぎし雨蛙 米澤 光子

中七「近づきすぎし」がこの句の生命。神社の境内の「雨蛙」か、または花嫁の控え室の窓の「雨蛙」か。「近づきすぎし」と言いながら、勿論罪でも害でもない。むしろ可憐である。品の良い俳諧味がある。

後ろ手をつけば実梅の残りをり 伊藤多恵子

作者は先ほどまで実梅を掬いでいたのである。その仕事を終えた後の、ひと休み中での発見。「後ろ手をつけば」が良く、葉隠れの実梅の様子が自ずと見えてくる。

梅を干す妻にたしかな乳房あり 戸栗 末廣

交はりのゆかしくなりぬ烏頭 省一。夫婦も年代を重ねると自ずとこう言つふうになるもの。ここでの「梅を干す」は、軒先などへ干す上向き作業ととりたいたい。着衣の上から「乳房」の膨らみが見えたのである。嫌みのない表現で、歳を重ねる夫婦の在り様をおかしく仕立て上げている。

裸子が押し合うてゐる岩の上 蘭定かず子

他人が見落としていたものを掬い上げた手柄がある。海よりも川泳ぎの景ととりたいたい。飛び込んだり泳いだりしていても、日が陰ると急に寒くなる。「裸子が押し合うてゐる」は、寒さによる震えを癒す為である。写生の眼のよく効いた秀品

椅子の背のネクタイ二本入梅かな 松山 直美

この句の「椅子」は事務用などではなく、応接間の、それも長椅子でなくてはならない。「椅子の背のネクタイ二本」のこの雑然さが、即ち「入梅」の本意なのである。常識でないところに詩の在り処を見出す作者の技量に感服。
(以下略)

同人 I

金澤明子

恒星巻

岡和絵

木野本加寿江

金魚屋の昼の匂ひをよぎりけり
水音に揺れやまずなり谷うつぎ
三更の月なき空やほととぎす
日曜市の店の隅なる螢籠
水無月のホテルの前の占師

三つ指に迎へられけり川床料理
猫の手と団扇を置きて介護人
散りさうで散らぬ夕べの金糸桃
水際にまづ置かれたる螢籠
納屋の戸をきしませて出す扇風機

加古みちよ

小池楨女

半夏生池をめぐりて帰りけり
ときどきは風に吹かれて羽抜鶏
螢飛ぶおいでおいでといふやうに
囀鮎きらりと川へ入りしまま
竹煮草つくづく雨の恋しき日

西山に雲ひとつ無き朴の花
裏に出て植田の風を存分に
朝涼の裏庭を掃く椎落葉
百僧の読経涼しき開山忌
はしり咲くさみだれ萩や開山忌

獅子座

山尾玉藻推薦

丸山照子

青嵐の奥に中央公会堂
黒南風や線路づたひに遍路笠
すれ違ふときみどりさす遍路杖
梅雨空へ煙いつぼん石切り場

高橋芳子

雪溪の麓なかなか眠られず
滴りの山に貼りつき家の建つ
ジエツト湯の真中に座せば新樹光
行水の犬に隣りて行水す

加藤君子

新緑の処を得たる色となり
三伏を迎へ討つ気の身の構へ
捨てし句をぬりつぶし居り金魚玉
友留守の扉を離る夏衣

高松由利子

機音に出できし路地の雨蛙
ペディキュアの螢光色と舟遊び
深吉野の闇の移りし螢籠
汗ぬぐふ右手左手神呪寺

山田美恵子

砲台の穴のぞきある海水着
夏の月首に添はざる羽根枕
虹立つやパスのこれより行くところ
からつばの葉擦れの舟や蜻蛉生る

河崎尚子

海酸漿鳴らし潮湯にひたりをり
塩田に続く外湯や虫簞
ペーロンの鉢巻寄れる松の下
遠筏に裸が一人海暮るる

竹内水穂

緑蔭や括り売らるる漫画本
金雀枝や濠風運ぶ御陵道
黒南風や忘れてゆきし子の玩具
柿の花こぼれてをりし利久井戸